

21世紀COEプログラム 平成16年度採択拠点中間評価結果

機関名	一橋大学	拠点番号	K12
申請分野	K<革新的な学術分野>		
拠点プログラム名称 (英訳名)	ヨーロッパの革新的研究拠点 ―衝突と和解― (Centre for New European Research)		
研究分野及びキーワード	<研究分野:社会科学>(法学)(国際関係論・史)(社会学)(文化人類学)(経済学)		
専攻等名	法学研究科法学・国際関係専攻、法学研究科法務専攻、法学研究科附属総合法政策実務提携センター、社会学研究科地球社会研究専攻、経済学研究科経済史・地域経済専攻、経済研究所		
事業推進担当者	(拠点リーダー名) 山内 進 他24名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書（平成18年4月現在）を抜粋

<本拠点がカバーする学術分野について>	<p>本拠点のカバーする学術領域は社会科学全般に及ぶが、その領域が広大なので本プロジェクトでは主に法学、国際政治学、社会学、経済学、地域研究、文化人類学が中心となっており、拠点の形成を推進する。</p>
<本拠点の目的>	<p>歴史上数々の暴力的衝突を経験してきたヨーロッパは、暴力の管理、経済・文化的相克の解消といった「和解」の経験知を積み上げ、現代においてはEUを形成・深化させてきた。そして、冷戦後にはその経験知に基づく「和解」のメカニズムを東欧に拡大し、東アジアなどの非ヨーロッパ圏にもその影響をおよぼすに至っている。この事実注目し、本拠点は、この経験知の内実を解明するとともに、「衝突と和解」をめぐるヨーロッパの現実をも分析しつつ、現在の紛争を解決するためのヨーロッパ発のグローバルな構想(ユーロ・グローバルイズム)を模索する。その際、現代の紛争が、中世的な脱国家的暴力の要素を具備していることに鑑み、中世以来のヨーロッパの歴史にも目を配りつつ、ヨーロッパ研究の革新的な社会科学的総合拠点の構築を目指す。</p>
<計画・当初目的に対する進捗状況等>	<p>本拠点は、(1)四つの領域研究グループを形成し、領域別の研究を推進するとともに、各年度において領域横断型のワークショップと隔年開催の国際シンポジウムを通じて、研究の統合を図っている。(2)国内外の研究組織との連携とネットワークの形成を通じて、研究成果の発信と交換を充実させるべく、事業連携を深化・拡大させ、Websiteによる研究成果発信を促進している。(3)若手研究費支援と非常勤研究員の制度を設置し、当該研究領域に関わる若手研究者の育成に努めるとともに、博士課程大学院生による研究プログラムを実施している。(4) 学内に「ヨーロッパ研究センター(Centre for New European Research)」を開設し、既存の「社会科学古典資料センター」との連携のもとにヨーロッパの「衝突と和解」にかかわる古典的資料や関連資料の収集を図りデータベース化を図る。</p>
<本拠点の特色>	<p>本拠点の主な特色は、以下の5点である。(1) ヨーロッパ研究の第1人者および新進気鋭の研究者と、本研究プログラムのテーマである「衝突と和解」に関連する諸領域のリーダー的研究者から構成されることである。(2)ヨーロッパ研究の古典資料が充実している。(3) アジアで最初のEUIJ(EU Institute in Japan)の幹事校として、内外の現代EU研究のハブとして機能できる。(4)国連大学・ユネスコ(MOSTプロジェクト)や総合研究開発機構(NIRA)などと連携協定を結び、政策分析に関する社会的連携が確立している。(5) IT技術を積極的に導入し、ストリーミング・ビデオ配信システムにより遠隔地にある外国の研究者との意見交換を行える体制、および海外への成果発信の体制を整備している。</p>
<本拠点のCOEとしての重要性・発展性>	<p>(1)本拠点は、ヨーロッパという概念を中心に、複数の社会科学分野の研究者による共同研究拠点として、中世から現代に至る時代を対象とする総合的・歴史的な研究を試みる。(2)本拠点は世界的なヨーロッパ研究ネットワークのアジアにおけるハブとして重要であり、発展が期待できる。(3)グローバル化時代に適した日本の対外政策的構想力の発展に貢献する。</p>
<本プログラム終了後に期待される研究・教育の成果>	<p>(1)グローバルな視点からヨーロッパ研究を行うことにより、ヨーロッパ諸国におけるヨーロッパ地域研究との相違を明らかにし、かつヨーロッパにおける解釈とは異なる解釈・批判・提案を行う、ヨーロッパ研究の世界的拠点を構築することができる。(2)国別もしくは時代別に個別的に取り組まれてきた研究をヨーロッパ研究として体系化することができる。(3)「衝突と和解」に関するヨーロッパの歴史および現代的対処の功罪を明らかにすることができ、この問題についての今後の研究を促進する端緒となる。(4)体系的で総合的なヨーロッパ研究のための研究インフラ整備の進展が見込まれる。(5)内外の研究者や研究機関、実務家、シンクタンク、EU関連機関、国際機関等のネットワークを形成・発展させることができる。(6)若手研究者育成プログラムにより、次世代研究者ネットワークを構築することができる。(7)研究過程での各種のワークショップや中間・最終成果報告に関する会議などを通じて、実務家などとの意見交換を行い、大学の社会的連携を強化することができる。</p>
<本拠点における学術的・社会的意義等>	<p>(1) 国内ヨーロッパ研究に対して、個々の研究の相互関連を明確にする学術的意義がある。総合的なヨーロッパ研究の拠点形成により、日本におけるこれまでのヨーロッパ各国に関する個別的研究や現代EU研究が、相互に関連づけられ、ヨーロッパ研究に関する諸分野間の研究協力を活発にするとともに、個々の研究のもつ意義が従来以上に明らかになる。(2)ヨーロッパ諸国におけるヨーロッパ地域研究に対する学術的インパクトも大きい。本拠点研究は、非ヨーロッパとヨーロッパとの歴史的・現代的相克を含め、グローバルな視点からヨーロッパを研究する革新性をもつものであり、ヨーロッパ諸国でのヨーロッパ地域研究に新たな視点を導入し、ヨーロッパにおける研究をグローバルな視点から再構築し、発展させる波及効果をもつ。(3)「衝突と和解」の問題について、アメリカ的な視点とは異なる議論を提示することの学術的意義も重要である。本拠点では、「衝突と和解」の問題について、ヨーロッパ研究および学際的研究を基盤に、ユーロ・グローバルイズムなどの概念考察を通じて、新しい議論の提示をめざしており、この問題についてアメリカの社会科学での議論が世界的に強い影響力をもつ状況に対して、学術的挑戦を試みるものである。(4)「衝突と和解」は、国際機関や政府にとっても政策的に関心の高いテーマであり、本拠点における研究をシンクタンクなどとの連携により進め、社会的に公開する意義は大きい。</p>

◇ 21世紀COEプログラム委員会における所見

(総括評価)

当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。

(コメント)

内外の諸機関に所属する関連分野の研究者を糾合し、広い視野からヨーロッパ世界における紛争・衝突と和解の歴史的経験を解明するものとして、有用な知見を蓄積してきている。とりわけ、アメリカ的視点とは異なる側面からのユーロ・グローバリズムを論じているところは、本研究の注目すべき特色といえる。また、人的育成にも、成果を上げている。

ただし、テーマが拡散するきらいがあるため、これまでのところ、学際交流連携が十分ではないところもある。オスマン帝国崩壊後の20世紀ヨーロッパの複雑な展開について、具体的な分析を積みつつ、大きな視点から全体の研究を統括するよう努めるべきだと思われる。また、ソ連体制崩壊後の混乱、とりわけ東欧での民族浄化という問題は、衝突と和解の重大局面ともいえるので、このテーマについても考察を加えてほしい。